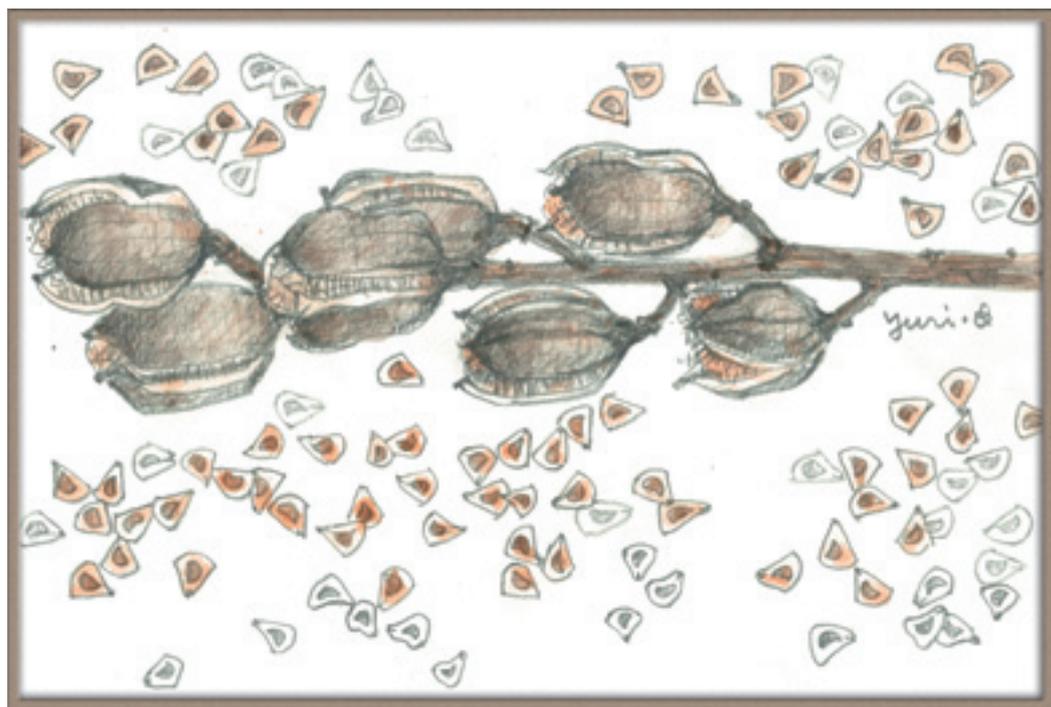


三河アララギ

平成二十五年

十二月号

第六十卷 第十二号



ニューヨーク日記(86) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

August 9, 2013 : Breakfast in Nîmes

Blue Shoe Diaries



プロバンスで朝食! 外のお庭に座ってのんびりと。この辺りでは何処へ行ってもジャムは自家製みたい。ここでは贅沢に5種類も出て来てもちろん全部試してみたよ。ローズ、イチジク、アブリコット、オレンジマーマレード、いちご。見るだけでも綺麗!ん~暫くここに居たいな~サイレンや車の音の代わりに鳥の鳴き声や風に吹かれる葉の音が聞こえるんだよね。

Ah~ la vie est belle! Waking up in Nîmes to a beautiful provençal morning. Taking a lazy breakfast in the garden. It seems like most places in Provence make their own jam? These were deliciously made with fruit and flowers from near by. Rose, fig, apricot, orange marmalade (out of this world!), strawberry. I wish every morning was like this. Instead of hearing traffic, and alarms, you hear birds singing and the sound of leaves dancing in the wind. This should be normal!

目次

第六十卷第十二号(通卷七二〇号)

表紙 オオウバユリの種
 ニューヨーク日記(86)
 感銘歌 御津磯夫第十歌集
 歌集「スモン」
 「秋の幽霊」
 ベニクラゲ
 五十鈴川
 秋日和
 面影
 敬老日
 秋茄子
 慌ただし
 千振りの花
 涙止まらず
 初冠雪
 付き添ふ
 秋晴れの
 神々しくも
 寂しい神無月
 孫二人
 世代交代
 英国
 シマトネリコ
 サクサクサクサク
 葦群
 幽かなれど
 三周年
 秋の夕暮れ

今泉 由利 (1)
 Blue Shoe (2)
 大須賀寿恵 (4)
 岡本八千代 (5)
 今泉 由利 (6)
 弓谷 久子 (7)
 青木 玉枝 (8)
 内藤 志げ (9)
 佐藤 喜仙 (10)
 安藤 和代 (11)
 伊藤 忠男 (12)
 林 伊佐子 (13)
 胃甲 節子 (14)
 鈴木 孝雄 (15)
 清澤 範子 (16)
 足立 晴代 (17)
 富岡 和子 (18)
 近藤 映子 (19)
 半田うめ子 (20)
 伊与田広子 (21)
 杉浦恵美子 (22)
 平松 裕子 (23)
 小野可南子 (24)
 山口千恵子 (25)
 夏目 勝弘 (26)
 阿部 淑子 (27)
 寺田 秀夫 (28)
 現代学生百人一首 (28)

川辺の葦
 ロンドン
 『ことよせ』
 『俳句』
 『かさね』の一句 十一月号
 私の一首
 「歴代天皇御製歌」(十九)
 贈呈誌
 ある自然科学者の手記(19)
 絹の話(37)
 物理学者と詩歌の世界(47)
 短歌に詠まれた茂吉
 楽しい時間(13)
 子規の短歌革新とアララギの歌人(17)
 富士山の短歌 (3)
 「水魚」のことから(155)
 ことのはスケッチ(42)
 編集室だより
 和菓子街道(86)
 お知らせ・編集後記・三河アララギ規定

松本 羅奈 (28)
 山口 洋平 (28)
 秋山 逸歩 (29)
 白井 信昭 (29)
 いーはとぶ (30)
 植村 公女 (31)
 一石 (32)
 伊与田広子 (33)
 小野可南子 (34)
 近藤 映子 (35)
 清澤 範子 (36)
 貫名海屋資料館 (37)
 大橋 望彦 (38)
 今泉 雅勝 (39)
 鮫島 一石 (40)
 山本紀久雄 (41)
 佐藤 喜仙 (42)
 夏目 勝弘 (43)
 岡本八千代 (44)
 今泉 由利 (45)
 平松 温子 (46)
 今泉 由利 (47)
 今泉 由利 (48)
 今泉 由利 (49)
 今泉 由利 (50)
 今泉 由利 (51)
 今泉 由利 (52)
 今泉 由利 (53)
 今泉 由利 (54)
 今泉 由利 (55)
 今泉 由利 (56)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

残り少なきわが日々なりと出でて踏む末^{うら}枯^がるる草冬萌ゆる草

P
71

白き雲となびく如き日待ち難しなんぢやもんじやの
一つ葉たごの苗

P
73

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

原紙切りつつ眠りたるらし事務室の電灯は皆つけしままなり

教職員児童に関する記事あればアンダーライン引く保健主事吾は

保育園長待たせおきたる応接室に黒き揚羽が舞ひ込みてゐし

「秋の幽霊」

蒲郡 岡本八千代

若きらの贈りくれたるこのカート引きてゆくぞゑ路々たのし

右の手を右側によせカート引くわれに初めての所作むつかしく

つひに吾もカートなるもの引きて歩む引かれて歩むごときにもなり

小夜更けて子規の紀行文読みてをり子規は己を「秋の幽霊」と

己をば「秋の幽霊」と書いてゐる子規の本読むわれの楽しさ

いつまでもひとり書屋に本を読む秋の夜長の楽しからずや

母屋へ来てまたスタンドの灯をとすなぜか安堵の心地こそすれ

くれなるの萩こぼしつつ活けてをり夫が台湾より帰りくる夕べ

夕餉すみてまたも時雨るる音のする二人居て一人のごとく聴きつつ

時雨るる音ききつつ浮かぶ子規のいふ言葉のニユアンス「秋の幽霊」

ベニクラゲ

東京 今泉 由利

満月を眺めし窓に朝の日の来たりて続く私の続き

揺らしなどしてゐたりしてつりふね草紫の花としばらく遊び

しばらくを共に過ごせりつりふね草奥多摩の土に返して帰る

自らを幸せにせむ決意して赤白万両昨日購ふ

赤万両白万両のふたつ鉢どちらがどちらまだ青き実よ

恐竜の頃にも匂ひを放ちしか公孫樹大木ギンナン実る

台風の雨降りてをり風吹けり雨の素粒子風の素粒子

ぎつしりのフィグス粒子に守られて私の姿のとどこほりなし

永遠に生きゆくことを繰り返すベニのクラゲはプカプカ動く

釣り鐘状赤き消化器透けみえるベニクラゲは三億歳か

五十鈴川

豊川 弓 谷 久 子

暑ければこもりて過ごさむ神仏も金にも縁無き我的生活

遷宮に湧き立つ神宮に詣でしと土産届きぬ伊勢うどんなり

宇治橋を渡る人波参道を進む人波人人をテレビ画面は写しをり

五十鈴川の涼風に暫しいこいたりき我が伊勢参りは遠き夏の日

一時帰宅の姉のベッドに寄り行きぬ三ヶ月ぶりに姉に逢ひたり

洗濯機に姉のパジャマを廻しつつ空しさ一人かみしめゐたり

線路添ひ泡立草の黄の花続く彼方に御堂山蒼し

故も無く心騒ぎぬ古き家のこわされて行く音を聞きつつ

梢までびつしり金に耀えり金もくせい香庭に満ち満ち

目覚めゐて今日の予定を考える為す事のあるこの楽しさよ

秋日和

新城 青木玉枝

秋日和彼岸桜は散り行きて樹下のベンチに朝のひととき
生き甲斐に何か一つの楽しみと施設の花かびん瓶の敷物を編む

出来上る介護士さんも喜んで玄関に所長室医務室に

この社会初めて味わう事ばかり失望したり経験したり

朝あさな空気のうちまさ格別でまず庭に出で深呼吸する

草生にて秋の草花つみとりて一輪はなざしにそれぞれの草花

この夏のきびしい暑さもやうやくに秋日和の空綿雲の流れ

どくきのこ毒茸これが松茸ならばいい白いきれいなこの毒茸を

一日が終ればベットに横たわり昔の事は忘れて眠る

野の花の名前も知らぬ花ばかり一つ一つを草生になでて

面影

豊川 内藤 志げ

撓め咲く萩を両手に掬ひたり御師のみ庭の濃き赤紫を

お邸を飛び石伝いに何処までも蜘蛛の糸など払えばよろし

み庭の奥ガラスの窓に先生の居ませる様な面影うかぶ

草かきに溝を作りてたつぷりと水を注ぎて大根を蒔く

台風と云へども雨を待ちてをり雨を頼みに大根を蒔く

待ちまちてひたすらに待つ雨は朝の窓に沙羅より雫

雨の後下の畑まで歩みゆく草の雫に裾を濡して

草の径刈り草の上を歩みたり足にやさしきわが畑の径

われを射し血ぶくれし蚊がゆつくりと高く障子の棧に止りぬ

傷いたみなき長きダチュラの初花に頬近づけて香りたのしむ

敬老日

東京 佐藤喜仙

かなかなを朝の散歩で耳すれば何やら知れず心は佗し

信州の稲の実れる田に立ちて思ふは戦後蝗取りの日々

お月見の団子を買へる母と子を見るは心が温くなる夜

鶏頭を見ると思ひ出す若き我パンチパーマでいきがっていた

愛犬のなえてしまるしうしろ足いざりて歩むを見るは悲しも

甲州の葡萄棚にはマスカットデラウエア等片仮名多し

莫塵の上干されてをりぬ栗南瓜迎へる冬の貴重な野菜

足もとにカンナの咲きし岬より見れば沖には白き客船

大山の阿夫利神社の神鹿に追ひかけられて尻を突かれし

いつの間に吾もそのなか敬老日区より千円の祝金受く

秋茄子

豊川 安藤 和代

豊作を喜ぶ農夫の声聞こえ心ほっこりひと日を過す

バアチャンの煮物旨しと孫の言ふ夕餉に里芋山盛りに煮る

川岸の彼岸の花も色褪せて水面は澄みし空を写せり

秋茄子の高値なげきつ鈴虫に一本百五十円を考えてをりぬ

罌雲百舌の高啼き萩の花散歩の私は秋の真ん中

本宮山を雨雲深くおおいゆく心せかせか大根を蒔く

漢字増えママから母に変わりたる孫の便りをくり返し読む

まだ七十幾つかの夢捨て切れず今宵絵画の道具を出しぬ

この秋は曾孫がひとり増えますと隣のばあちゃん満面の笑み

温かき味噌汁旨し今朝の冷え無口な夫もおかわりの椀

慌ただし

大阪 伊藤忠男

バタバタと出入り激しきI・C・U我が身に写し穏やかならず

神出雲季節外れの夏模様木々まだ青く実り少なし

ススキの穂風に吹かれて背筋に触れてすくめる高原の道

天空に近い野辺山微かなる電波にロマン搔きたてられる

この星のどこかに我ら同胞がいるかと思えば夢が膨らむ

冷え込みも中くらいなり大阪の街は朝霧温かな風

診断書埋め尽くしたる病歴に長生きしたる証がここに

前の海警戒しても片手落ち今や背後に山津波あり

山肌に傷跡残し台風の去りて心の曇る秋晴れ

乗り継ぎの階段上がる急ぎ足動悸息切れ目うつろなり

千振りの花

岡崎 林 伊 佐 子

千振りの白く小さく咲く花に秋立つ風の小止みなく揺る

白い小花つけたるままに千振りを逆吊りする軒に匂へり

千振りは胃薬となりて若き日の医者なき里の僻村おもへり

虎杖も素枯れし茎も背丈越す石ころ道を夫の補修する

持ち山の境界を息子に教へ行く八十路の夫の相続おもひて

間材に倒す杉木も五十年の命みじかし育てたる木は

街に住み旧家を守る老いふたり帰省する日は長閑にすごす

朝な夕となりの町に通い行く晴耕雨読の畑は広い

老いぬれど共に励まし労はれるわれに夫あることの仕合せ

使いなれ座右に置きし国語辞書やぶれて繕ふ雨の日今日は

涙止まらず

豊橋 胃 甲 節 子

秋空は高々高く澄み渡り達筆の友の手紙嬉しく

十年を逢へぬ弟へアララギの弟を詠みたる十月号を送らむ

死ぬ事は今日か明日かと言はれつつ吾は生きたり十一年を

死ぬ事に何の怖れも持たざれど災害の度におろおろとして

今日吾の最後の日かと思ふ程あかときより続く胸苦しさに耐へをり

胸苦しきを言葉にさへも出さずして夫の昼餉の支度に立てり

埋りたる女ひとに頑張れ自分達も必死に頑張るからと自衛隊員の声

自衛隊員泥にまみれつ励ます声涙止らずテレビの前に

黄昏るる厨の窓より花数の少なくなりたる白き白粉花

台風は外れて午後より強き雨金木犀はなべて散り果つ

初冠雪

沼津 鈴木孝雄

金木屋の香漂う石畳県美術館へ歩が速まりぬ

曼荼羅に描かれし富士への信仰は今もみんなの心に宿る

郡上八幡宗祇水を汲み上げていにしえ歌人の心を偲ぶ

台風 of 交通混乱おしてまで五時間遅れで朋友到着

気象病まだ聞きなれぬ病名は極端気象のなせるものかな

富士山の初冠雪で秋一気雪の多さに寒冬予感

赤とんぼシソの実の先にちよんと止まり何を思つか翅傾けぬ

オンブバッタをみつばの葉から追い払い追ひ払えどもつがい離れず

シソの枯枝感謝を込めて片付けぬお返しにもらう爽やかな香

負けた碁を駄目が詰まって大逆転諦めぬことが運を呼び込む

付き添ふ

春日井 清澤 範子

百日紅剪定したるも小枝伸び庭を囲みて鮮やか咲けり

台風にも合わず田の稲実りたり吾が行く道に赤とんぼ飛ぶ

朝あさの廊下の雨戸開けるたび椿の花芽とところどころに

大型の台風に残暑をさまりて庭より見ゆる半月の月

夫も吾も腰痛膝の病持ち娘はヘルニアの点滴を受く

ピンク色なる点滴を見つめぬる受ける娘も付き添ふ吾も

ヘルニアの娘の点滴を見守りて歌のメモするベッドの横に

皆の無事祈りて神社の神殿に長く長く祈りてをりぬ

病院へバスに乗るなりバス停は梅の花咲く公園の前

娘を案じ今朝も早く目覚めたり吾は最善を尽して生きる

秋晴れの

東京 足立晴代

夕暮のコラボの雲の美しく入道雲に変らぬ様に

樹々の葉の照葉色増す楽しみに日々過し行く秋の夜長を

実りの季あまたの水菓子送られし味あう日々は倅せなりけり

美味々と食せる吾は只倅作りし人々苦勞の程を

山々の紅葉色増す日も近し錦の雲を夢に見ながら

秋晴れの見上ぐる空に一筋の白き線ひきとび去る機体

秋日和黄金の實のり眼のあたりうねる穂の波絵を見る様に

秋風も日ごとに冷めたく肌に沁む過ぎし猛暑を忘れ去りたり

秋草の茶花にあいし数ありて宗全籠にあふれ生けたり

秋晴れに老いも若きも集いけり心一つにスポーツの日々

神々しくも

東京 富岡和子

離陸あと雲海の上をいつとき色どりの秋北の大地へ

あさ時報目ざめ爽やか山の家桜もみじの落葉拾いを

朝焼けに土手の草むらキラキラと露の水玉しずかに落ちる

蕾かと茎に寄り添ういと小さしカエルの目玉チヨット動く

犬と散歩シオン花咲く畦の道赤トンボ群れ高く低きに

明きらけし上弦の月あおい空ハクチヨウV字夕焼け雲に

夢心地ゆう山包む緋色雲かがやき流る神々しくも

切り株に空うつす水鳶の舞う疎開の景色塾学の頃

トラクター洗う水音其処こゝに雪むし飛びて冬を迎える

寂しい神無月

名古屋 近藤 映子

おい〜と夫の声にて目覚めれどまだ明けきらぬ朝の四時

昨日までジィ〜鳴きし蟬の声今朝はびたりと止る

神無月朝夕の涼風心地良し日中なおも30℃越す

点滴に通ひし我は夫の見舞も出来ずして寝付きも悪し

入院中の夫の声聞いたごとく目覚めれど吾一人のふとんの中

秋風邪の咽喉の痛みを引きづりて夫の見舞もおことわり悲し

十月になりても続く夏日の暑さ我身は内科医点滴を受く

お彼岸に墓参の息子のお土産雨傘やっど開く嬉しさ

神無月台風26、27号と次々日本列島に近寄り来るよ

ああたまらなく寂しい神無月風邪引き吾は見舞いも出来ず

孫二人

新城 半田うめ子

前の畑の柿の木に来て数羽なり数多の柿つつく小鳥ら楽しむ

昼寝して夜も長く寝る一人の生活年寄りにての勝手気ままに

孫二人多くの食品もちてくる種々の物品毎日楽しむ

若き日に行きたりきたり思ひ出の大震災しんの東日本を

西川の川辺に見ゆる黄の色いろのあわ立草の数多に咲きをり

胃癌がんにてわが友の言うかたい物間食は無し散歩を楽しむ

淋しさよ共に学びしやさしさの杉浦様の永眠かなしく

現在の役所は親切字の読めぬ時は教へて書きて下さる

生きてゐるそれだけで満足若き日先達だつとして皇居へも行きし

世代交代

豊橋 伊与田広子

座敷にはリスの縫いぐるみありたるに虎の掛軸掛けたくはなし

絞り立ての牛乳を直ぐ牛舎にて雄猫飲み後雌猫^{あと}飲む

雌猫は牛乳飲み終へ巢に帰り子猫ら競ひ乳房に吸ひ付く

猫の巢はゆつたりとした箱の中に羊の毛を敷き詰めてあり

介護にはならぬやうにと体操を申込みたり市役所主催

市役所へ体操やりに行く途中膝痛み出しやつと着きたり

帰りには膝の痛みもなくなりぬ快適に歩いて家に着きたり

体操は椅子に腰掛け手や足を動かすだけの運動なりし

健康は自分で守らむ先づわれは早寝早起き習慣づけむ

出演の歌手も指揮者もわれ知らず世代交代感じつつ見る

英国

蒲郡 杉浦恵美子

小窓より丘に草喰む羊見ゆ英国の田舎に旅装解きたり

築五百年事も無げなり家主は黒光りする梁を見上ぐる

五百年保てども夜更石壁の冷たさ我のまどろみ奪ふ

そつと開く機窓一面オリオン座パノラマ広がる旅の終りの

ただいまと言へど応ふる筈もなし半月ぶりの我が家静もる

我が家なれど人の気配がしないのは何とも不気味そつと窺ふ

ああこれで父の年忌も済みました漸く秋空眺むる心地

弟と次に会ふのは何時ならむ父の年忌も済みてしまへば

たった二つ実りし柿を先づ夫に供へむいづれわたしがいたたく

独り居に慣れし気はせぬこの夜更け季節外れの野分聴きつつ

シマトネリコ 豊川 平松 裕子

曇天の今日見る富士の頂きに雪積もれるを指さして言ふ

疲れ果て帰れる道のカーラジオ富士初冠雪のニュース流るる

雨足は強くなり来ぬ畑中に何鳥ならむ何を啄ばむ

我が店の前に細々生き続くシマトネリコよ我も細々

ガレージに店を構へて幾年か風に日除けの揺るるに驚く

客なるかと驚きて立つ我が前を風は日除けを持ち上げて去る

開き切らぬ白花の中に黄の蕊の詰まりてをりぬマユハケオモト

鉢をはみ出し両極に咲く二花のマユハケオモトは初めての花

押し車押して草取りに行く媼九十八才の姿見送る

時じくの黄素馨の花二つ三つ落ちるを踏まず出でて来にけり

サクサクサクサク

豊川 小野可南子

父逝きし二月のかの日冴ゆる空オリオン三ツ星のあのまたたきよ
縁台に並びて夏の星々を指さし示しし我父なりき

家中の窓開け放つこの朝あしたいづくならむか祭りの号砲

ハイビスカスの赤き花卉のほどけゆく今朝の新聞とり入るるとき

まん丸をいくつか書いてアンパンマン孫の望みのお絵かきしたりき

そこここに孫の描きにしアンパンマン今は私を嗜むるこの子

樹々高し緑は深し進みゆく伊勢の宮居の玉砂利の音

今まさに神嘗祭の拝礼を斎王の宮の尊きおすがた

御退出の斎王の宮の御列を畏み送る玉砂利の道

我が前を通りゆきます斎王の宮の御列サクサクサクサク

葦群

豊川 山口千恵子

西空を茜の色の尾を引きて動くともなし仰ぎ見てをり

赤々と畦を彩りぬし彼岸花いろ褪せにつつ秋になりゆく

葦群を二つに分けて流れゆく久しく待ちぬし昨夜よりの雨

綿の実の十粒程を春蒔かむ福島生れのオーガニックコットン

帰りくる頃には白く実はじけぬむ福島の綿の種渡して行きぬ

はや冷ゆる季節ならむかたより来ぬ靴下はきたるカバのイラスト

炊き込みの茸御飯を食べました今は日本のサンマが食べたい

床の間の「五體投地」の軸の前気おくれしつつひとり座りぬる

はなやかに赤き花々咲き満ちて一本高し荒れ地のデイコ

高く伸ぶる枝にはやつく蕾あり春咲く木蓮枝伐られゆく

幽かなれど

豊川 夏目勝弘

朝顔に今止まらんとする花蜂の羽風にゆるる白き花筒

生垣に残り咲きゐる朝顔の幽かなゆれの気になるあした

台風の去りし朝の青のなか掠れ筆もてはきし白雲

竹の簀にこの一夏を過ごしきぬ今夜の冷えの少しきになる

食卓にころがる一粒の白ゴマに気をとられつつ朝の飯くふ

真夜中に隣りに灯りし灯の影を目覚めし闇にみつめてゐたり

新聞を取りに出で立つ門口の風に幽かな違ひを感じず

我が部屋の翳るも近し松原より低く細くヤマバトの声

音のなき闇に目覚めて思ふことなくなり耳鳴り気になりてきぬ

秋空の青に燃ゆる太陽の気吹いぶきを肌いぶきに感じてゐたり

三周年

横浜 阿部 淑子

エーゼット集いし人のやさしさに笑顔溢れて三周年の祝
人騙し我欲を充たす情報だまの耐えなき日々だまに嘆く老いの身
大型の台風去りて空澄めど傷跡深く心痛みぬ
避難指示解けて大島帰省すも埋もれし家屋如何にし思う
親友の野辺の送りの車窓より涙にうつる雲上の虹

秋の夕暮れ

東京 寺田 秀夫

散る花を嘆けし人の言の葉にわれ涙する秋の夕暮れ

現代学生百人一首 東洋大学

コロンビアインターナショナルスクール六年 松本 羅ら奈な

作文で将来の夢書いてみたなりたい自分きつと見つかる

愛知県教育大学附属名古屋小学一年 山口 洋平

あめのときてるてるぼうづくったよあめがやむころにじがでてきた

川辺の葦

「招待」 秋 山 逸 穂

雨に打たれ風に押されて目を凝らす台風前夜の外周巡回
枯れてゆく川辺の葦にさえざえと風渡る音みちておりけり
目に青空からだにひかりしみ込ませ川辺を行けば力満ちくる
虫の音につつまれてゐる河原に東雲の色きざし始めぬ
霧雨に濡れゆく街を走り去る車のあかり路面ににじむ

ロンドン

豊川 白 井 信 昭

山頂に枯れ枝かたづけ気持よし心も軽く下りゆくなり
わが息子のロンドンの旅七日過ぎはや帰国日と今日はなりたり
豊橋駅に時刻どうりに出迎えて息子の無事にまずは安堵す
稲刈りの田んぼも今や大型のコンバインにてたちまち終る
吹き晴れて三河の海の沖合におおいなる船おおきく見ゆる

『ハルよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

ひまわりからコスモスの花と移りゆく夜長に読み入る「枕草紙」

下駄箱の奥にひっそりと塗り下駄がわれのか妹のか赤き鼻緒の

岩瀬 信子

チヨロチヨロと注ぐ湯の音やはらかし湯船に浸かりて星を数える

ひぐらしの声に目覚むる「風の宿」やさしき息子らとの夏のすぎつつ

石田 文子

栗色に髪染めずしてよしとせむ秋の彼岸の空みつつ思ふ

幡豆の海秋の銀色に輝きて昼下がりの道ゆるると歩む

山崎 俊子

つくづくと我が子を見れば二児の父いつしか親の顔してそこに

コンビニの公衆電話はぼつねんと店の灯を背に今夜も立ちをり

水野 絹子

スマホなど便利なる世にとまどひぬわれの生き来し日々は遠くに

中学になりたる孫の運動会「楽しか」と言へば「うん」のみ一言

牧原 規恵

玄関をあければ朝の光さし新しき風の頬を撫でくる

我が部屋のカーテン替へをり若草色に「アルプスの少女」の気分になりつつ

稲吉友江

留紅草ルコウソウの赤々今年も咲き初めりかの日の君にいただきし花

わが幼のバイオリン弾く得意顔メルボルンよりの今スカイプに

鈴木美耶子

彼岸過ぎて座敷簾をしまひをりいつしか庭に白萩の花

夫とわれ映画鑑賞に出かけたり宮崎駿の「風立ちぬ」見むと

吉見幸子

観月の調べもやみて真清田ますみだに氏子のごとく神饌うける

初めての神饌受けたる観月会包みに重なる里芋三個

牧原正枝

一膳の箸を洗ふは淋しかりたとへ四五日しごにちの間といへども

梅干をちぎりて入れし握り飯己がにぎりて己が食ふかな

岡本八千代

『俳句』

金木犀散歩の犬の振り返る

植村公女

ポケットの酸橘温みし旅はじめ

蛍光灯とり替え秋の燈灯しをり

億年の生命繋いで蜻蛉とぶ

一石

虫の目と鳥の目で観る里の秋

文学の世界を覗き灯火親し

『かさね』の一句 十一月号

寝ころべばさらはれさうな星月夜

佐藤喜仙

秋澄むや十二神将の立ち姿

松本周二

秋晴れや仰ぎて潜る雷門

古川千鶴

秋祭りふんどし姿の小さき臀

川井素山

秋刀魚焼く匂ひにくぐる赤暖簾

安藤虎醉

空高し言葉行きかふ市場かな

田島昭久

草の実を土産に猫の朝帰り

小池清司

古雜誌にまぎれてをりし秋団扇

長久保郁子

朝霧や犬の散歩がのつと出て

岡野安雅

曇天に藍を失う秋の海

山本草風

葡萄棚続く街道甲斐の国

青木英林

文字消えし仏足石に銀杏散る

田中清秀

潮風の砲台跡に小菽咲き

盛岡陽子

甲斐駒を木曾へ乗り替へ伊那の月

池内とほる

秋の暮風が運ぶか馬頭琴

丸山醉宵子

星月夜途切れ途切れに牛の声

小柳千美子

雲流れ刈田の煙流れ消ゆ

和田勝信

綿菅の白玉そよぐ風に揺る

橋本修平

銀ブラの思はぬときに秋の蝉

柳田皓一

不揃ひの房の残りし葡萄棚

後藤克彦

伊豆の宿百舌鳥を聞きゐる浜辺かな

長島清山

秋風にカウベル響くアルプスの谷

吉田博行

私の一首

思ひ出のつまりし土地にわれをりぬ老人ホームなど行きたくなき

伊与田広子

二五年七月号

私が物心ついた頃隣地を一反買い埋立てた。その頃は荷車の大きなのに土を入れ馬が引いて来た。その後左官や大工が入り大忙しで借家を建てた。その借家も古くなり取払ってガレージとなっているが、私にとっては一つの思い出であります。借家の時は、その子供さんと遊んだ思い出もあり、今の私にとっては子供の頃からの思い出があり、その思い出を心に秘めながら生活しており離れることが出来ません。終の棲家となる所です。

つばくらめ我が肩かすめて高みへと線残すがに速く飛翔す

小野可南子

二十五年六月号の私の一首です。

毎年私は燕の初見日から我が家周辺の空から姿を見かけなくなるまで、とても親しみをもって興味ぶかく見ております。

ある朝、歩いている私の肩に触れるかと思うほどに擦り抜けて空の高みへ、翔んでゆく燕の流線は、黒く細くしなやかに私の目に脳裏に残像として見えたのです。

この光景をいつか一首にしたいと思いつつながら、やっと選歌されたのです。

我が耳に何も聞こえぬ降る雪は八階ベランダに白く白く

近藤 映子

今年二月始め久しぶりに名古屋に雪が降った。実際に音を感じていないのに降り出したと感じて立ち上った。何も音は聞こえていないのに雪はベランダのコンクリートにバサバサと直径2〜3cm位余り落ちても直ぐには消えない。何時もと言うか、此頃ちらつく雪は落ちるとすぐ消える。しかし今年の雪は消えずにベランダを白く白くして行つた。ベランダの外は真暗闇。見る間にベランダが白く白く、なつて行くのを見ていた。

苦しみも福に変わる思ひして辛きも幸せと思ひ暮さむ

清澤 範子

平成二五年五月号より

人は誰も苦悩を持ちつつ生きるもの。私にあつては二十七歳にて娘を出産し、その肥立ちが悪く副作用の多い安定剤をのむ病いに悩まされてきました。幸い自転車に乗ることが出来、日々の生活は神社へ詣でスパーへ行くのが日課です。途中公園があり、夫とブランコに揺れる時の幸せ、又泣きたい時は一人風呂で涙を流し、私と同じ葉をのむ娘を愛しく思ひ、夫の励ましに勇氣と元氣をもらい頑張る。これが私の生きる原点なのです。

「歴代天皇御製歌」(十九)

貫名海屋資料館

『孝謙天皇』第四十六代・女帝・在位七四九(三十二歳)―七五八年(四十一歳)

『称徳天皇』第四十八代重祚・在位七六四(四十七歳)―七七〇(五十三歳)

孝謙天皇は、聖武天皇の第二皇女。(二代の皇位につかれた女帝)。この御代、東大寺大佛殿竣工。大佛開眼供養。鑑眞の来朝。正倉院北倉に聖武天皇の遺品が収蔵。漢詩集「徳風藻」の成立。

そらみつ 大和の国は 水の上は 地ゆくごとく 船の上は 床に居ること 大神の
鎮へる国ぞ 四つの船 船の舳並べ 平らけく早渡り来て 返り言 奏さむ日に 相飲
まむ 酒ぞ この豊御酒は (万葉集 19―4264)

そらみつ II 「大和」の枕詞。

日本国は、神が護り下さる国である。遣唐使船がつつがなく唐国に渡り、帰り来て復命を奏上する日に、その日に共に飲む酒ですよ、この美酒は…。

四つの船早帰り来としらかつく我が裳の裾に鎮ひて待たむ (万葉集19―4265)

しらか II 麻や楮の類。鎮ひて II 身をつつしみて。四つの船、早く帰ってくるように、しらかの裳の裾に祈りを込めて待っていきましょう。

贈呈誌

△秋楡

十月号

伊藤 妙子

一列に並び特訓の子鴨たち陸からわれらエールを送る

十月号

高木 啓子

炎天の庭に繁れる雑草を見なかつたこと知らなかつた事に

△愛媛アララギ

十一月号

土居美津子

台風の逸れて静かな夕暮の空にはのちの月澄みてをり

十一月号

大谷 淳子

盆過ぎて去りゆく息子とこののを言はず手を振りバスに見送る

△鹿児島アララギ

十月号

上原 泉

法師蟬夏の終りを告ぐるがに一声鳴きて庭をはなれぬ

十月号

市来 房枝

捕まへし唯一匹の兜虫孫はバナナを与へて逃がす

△高知アララギ

十月号

浜渦 静子

よみきかせ今日は慎太郎の生きしましづかに聞きくるる十一人の児ら

十月号

宮橋 敏機

委員われ投票箱は空なりと先ずは示せり手品師のごとく

△冬雷

十月号

近藤 未希子

むらさきが美しく見ゆる眼となりて八ヶ月過ぐ心をどらす

十月号

松原 節子

父と母離れに越して一つ部屋に寝起きしてをり喧嘩もせずに

△柘

十月号

腰山 きぬ子

何事も唯丁寧にと心して生き来しにすぎざる吾のひと世か

十月号

横山 季由

見下ろしの谷の彼方に山霞み山より淡し近江の湖は

△群山

十月号

海輪 美代司

あかときのひかり移ろふときの間を余震過ぐるを待つはむなしく

十月号

皆川 二郎

雲の中にあるかのごとき那須の湯いづくに鳴くや鶯を聞く

△榎の木

十月号

塚本 明夫

草をとり石灰をまき堆肥いれ大根あとの畑たがやす

十月号

望月 百合子

洞窟をくぐりてほそほそ続く道伊豆半島の端先あるく

△穂の原

九月号

田中 浄子

朝々に畑にて受ける風嬉し白露の今朝は一枚かさねむ

「冬雷短歌会文庫016」 関口正道歌集

角のある活字に慣れぬし我が指が軽くて円きマウス動かす
子の無くて家名を刻むつもりなく小目石に彫る「空」の一字
起きて独り眠りて独り格別に淋しくもなし介護保険証届く

ある自然科学者の手記 (19) 大橋望彦

『何かをしている人間』①

物事で、感じることは犬でも、小鳥でも、蟻でも出来ることである。然し、物を創り出し、造り替えることは人間以外の生物にはなかなか出来ないことだが、それでも彼らは何かを創っているのかも知れない。唯、人間は

見たものを分析し、それを再現し、そこにあつた物以外のものを創り出す能力がある。其処には思考能力も関与している。他の生物には追従を許さない。

それで、考えた。折角、与えられた人間の特徴を最も有効に發揮することの出来る、芸術家も、科学者も、我儘でなくてはならない。何故ならば、我儘の中に存在する自己主張があつてこそ、オリジナリティ (originality: 固有性) が確立するからである。オリジナリティのない

芸術も、科学も存在価値がない。それは、模倣はあつて

も、新発見が無いからである。

芸術と科学には共通するものが沢山ある。芸術は形而上の事象を扱い、科学は形而下の事象を扱うので、棲む世界が異なると普通には考えてしまいがちである。両方の世界は、確かに異なるように観えるが、共存することが出来るのである。それは両者とも人間が何か物を創り上げる者 (良く云う「ものづくり屋」) として共通性があるからである。

芸術家にも、科学者にも欲しがる俥に、物を与えよ。限度はどちらにも無い。芸術家、科学者どちらにもハングリー精神が必要とされている。満腹状態では良いアイデア、発想も思い付きさえ無くなる。即ち、満足した者には進歩がない。先に進めない。進歩のない芸術家も、科学者も存在の意味も無くなり、魅力も無くなる。

芸術家も科学者も、問題意識を常に持つ。それは常に無限の広がりを持ち、その広がりには、自分自身で拡げている。芸術家も科学者も常に問題を抱え込み、常に悩み、

そして没頭する。それは、疲れるし、辛い事だし、苦しいが、常に楽しんで居る。唯、芸術家も科学者も、奢る無かれ、謙虚であれ、そして、好きなようにやれーと、だけは付け足しておく。

『何かをしている』ことの楽しみというのはある。人間は健康であれば、『何かをしたくなる。』行動力とでも云うのであろう。芸術家や科学者に限った話ではないかもしれないが、じつとしていられない。其処で考える。『何をしようか。』目的、とか目標とか云うものである。いろんな人が居るのだから、それぞれの目標とするものや目的があつても不思議でない。ここから先が問題である。『何か今までに誰も考えたこともないようなこと、したことのないようなこと、をしてみたい。』これがオリジナリティ（固有性）の始まりである。しかも其処に、『何でその様なことをしたいのか』と言うことが加わると、それは動機（モティフ）は何？ということになる。『どうやったならばそれが想う様に出来るようになるのである

うか。』

ここで、芸術家や科学者の出番となる。でも、何も専門家でなければならぬかというところ、別にそれを決める定めがある訳ではない。誰でも好む、とことん突き詰めるだけの意力を持ち、実行出来る者がやればよい。唯、誰にも負けられないところの突き詰める力と知識を持たねばならない。『何かやるということはその辺で決まってくる。』其処にはよく言う専門家などは実際には意味が無い。誰でも自信を持つて手を挙げれば良いのである。云つてみれば、『好きこそ物の上手なれ』が高じて専門家となつてしまふことで良い。それは物にどれだけ拘こだわる事が出来るか否か、即ち、突き詰める能力の差が其処に出るだけである。誰よりも一歩先を進んでやればよい。その能力の差も、勝手に世の評論家がつけることで、気にすることも無い。要は、『何かやった』で、事は決まる。ノーベル賞を受賞すれば文句無い。

絹の話 (37)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

繭生産の盛衰

絹は繊維の王様などと云われ、古来から人々の憧れの的であり続けています。ところが近年世界的に繭の生産が衰退傾向にあります。それは一見絹と見間違える様な化学繊維の目覚ましい発展があります。

初期の化学繊維は「化繊」と呼ばれ安物の代名詞でしたが、今や天然繊維100%の衣料品を見付ける事が難しいほどになりました。化学繊維は絹の様に、綿や麻の様に自在に化ける事が出来ず。最も人々の心を掴んだものは丈夫で長持ちし、安価で手入れが簡単。自動洗濯機に放り込めば乾燥して出て来ます。この便利さに慣れた人は二度と天然繊維、特に絹には戻れません。

絹を同様に洗濯機に入れると、しわだらけでバリバイのわら屑の様になってしまい、多くの人はここで驚愕し、どうして良いか判らなくなってしまう様です。

洗濯機は大量生産大量消費の中で生まれて来た物です。絹の様な大海戦術で作られた天然繊維を洗う様には作られていないのです。ですから絹はドライクリーニンゲ表示が義務づけられています。しかし生地の変色や染

めの変色など苦情が絶えません。やはり蚕が心地よく糸を吐く温度(20℃〜30℃の水)で絹を荒らさない中性洗剤を使って昔ながらに手で押し洗いする事が最もよいのです。ところがその心遣い、手間を惜しむ人が余りにも多くなってしまう、絹を着ると軽い、健康に良いなどと云う事は馬耳東風、絹離れが定着して来た感があります。

〈日本の盛衰〉

日本の絹生産の歴史は卑弥呼の3世紀以前から行われた様ですが、聖徳太子の7世紀には税として納められる様になりました。江戸時代各藩の財政立直し等の一環としても広く奨励されましたが、大量輸入国でもありました。明治になり国是として絹生産に取り組み、藩政時代の名主や、庄屋等の組織をフル活用して、瞬く間に世界一の絹輸出国に成長したのです。その陰には各県に蚕糸試験場などを設置して、蚕種の管理(卵の管理)品種改良、糸の企画統一など並々ならぬ努力が有りました。昭和初期には輸出総額の40%を越え、名実共に絹立国でした。戦後の復興期には、戦争で失った着物を箆筒に満たす事に女性が狂奔したのです。絹の着物は女性の心の拠り所であり、家の財産と見なされていたのです。ところが化学繊維が多様化して来て、女性の職場進出が一般

化した昭和40を過ぎると洋服ファッションが主流となり、着物需要は急速に衰えて来ます。

経済は高度成長期に入り人々の所得は倍増して行きます。繭生産は割に会わなくなってしまうました。経済成長の大きな西日本から繭生産農家は減少し、蚕糸試験場も廃止されて行きました。そこで国は100年蓄積して来た研究成果と膨大な研究者を一堂に集めた「蚕糸昆虫研究所」を筑波市に開設しました。経済成長に遅れ、米作に不向きな関東以北が平成初期迄頑張っていました。が、繭生産農家の減少は著しく、山形県、福島県、群馬県等主たる産地の蚕糸試験場も廃止され、県庁内に移された蚕糸課もしばらくして姿を消し、蚕糸を統括する蚕糸業法廃止となり、政変による機構改革により蚕糸昆虫研究所も農業生物資源研究所となりました。

ここに明治以来130年、蚕糸立国としての組織的機能が全てなくなりました。今年度の繭生産高はおよそ往時の1000分の1の400トン。小石丸といった特殊な繭にいたっては皇后陛下が最大の生産者となってしまいました。

繭の生産が一時期は国の経済を支えて来ましたが、お金持ち、大企業になったのは蚕の蚕卵屋、相場屋、機屋、呉服屋（越後屋：現在の三越に代表される）等々末端に

行くほど儲けが大きかったのでした。繭生産農家は寝る場所も惜しみ昼夜を分たず働きましたが、大企業になった人の話は聞いた事が有りません。何だか小さい魚が大きい魚に食われる食物連鎖の様な構造に思えてきます。

〈世界の盛衰〉

5000年前中国で始った絹の生産は、その生産技法を4000年国秘として利益を独占し中国の都は栄華を極めて来ました。6世紀頃からトルコ、ウズベキスタン等西アジアに広まり、やがてヨーロッパ全域にまで広く作られる様になりましたが18世紀末、繭に微粒子病が発生しヨーロッパ全域の繭が育てられなくなり、繭生産は途絶えました。

中国は日本の100年を除いて常に世界の価格形成権を握って来ています。現在も世界の80%を生産しています。しかし繭生産は貧農の仕事の様で、中国の経済発展に伴い転作農家が増大し生産維持に苦慮しています。世界第二の生産国ブラジルも繭生産から撤退を始めました。繭生産は年収8000ドル以下の地域でないと成り立たないと云われています。

物理学者と詩歌の世界 (47)

一石

マルティヌス・ヴェルトマン

マルティヌス・ヴェルトマン (Martinus Justinus Godefridus Veltman, 1931) はオランダの理論物理学者。1931年オランダのワールウィイクに生まれた。1948年ユトレヒト大学入学。1963年物理学の博士号を取得後、スイスのジュネーブにあるセルンでニュートリノ実験に関わった。1963-64年米スタンフォード大学のSLAC国立加速器研究所滞在中に数式処理ソフト Schoonschip を開発 (注1)。

1966年ユトレヒト大学の物理学教授に就任。1971年大学院生のヘラルディス・トホーフト (Gerardus t'Hooft) に電弱ゲージ理論の繰り込みに関するテーマを与えて、この分野の長年の課題を解決して注目を集めた。1981年、アメリカのミシガン大学へ移った。ヴェルトマンとトホーフトは1999年のノーベル物理学賞を受賞する。現在、ミシガン大学の名誉教授。彗星 Asteroid 9492 Veltman はヴェルトマンに由来する (参考資料1)。

この世界を支配するのは、電磁気力、弱い力、強い力、

重力の4つの力である。このうち、電磁気力と弱い力を統合する電弱理論は1960年代にグラシヨール (参考資料2) やワインバーグ (参考資料3)、サラムによって提唱され、グラシヨール・ワインバーグ・サラム理論と呼ばれるようになった。しかし彼らの電弱理論が「繰り込み」可能な理論 (注2) であるかどうかを確かめるという大きな課題が残されていた。この課題が解決されて初めてこの理論は真の意味で完成されることになる。電弱理論の計算に現れる無限大を除去するという難問に挑戦したのがヴェルトマンであった。彼はたった一人で「繰り込み」の問題に挑戦していたが、その計算はきわめて複雑で、どうしてもうまくいかなかった。そこに現れたのが大学院生のトホーフトである (1970年)。ヴェルトマンはトホーフトに「繰り込みの手法を使ってうまく無限大を消すことができるかどうかを調べよ」という課題を与えた。まもなく「繰り込み可能である」という答えが示された。トホーフトはワインバーグやサラムらができなかったことをやってのけたのである。ヴェルトマンが用意した理論で武装したトホーフトは、繰り込み可能であることを証明したのである。ヴェルトマンの頑固なまでの方向性と、トホーフトの輝く才能が最高の組み合わせとなって大輪の花を咲かせたのである。この成果は1971年夏に開催された欧州の物理学会で発表され、ニュースはたちどころに世界に伝わった。

ヴェルトマンの言葉（参考資料4から）。

1) 説明するというのはなかなか骨の折れる作業である。宇宙がなぜ存在するのか説明できないのと同じように、ある粒子がなぜ存在するのか説明するのは難しい。

2) 1963年に始まったセルンでのニュートリノ実験は、私の物理学に大変な影響を及ぼした。前人未到の新世界に踏み入る興奮は他の何ものにも例えがたい。失敗に終わった実験だったが、あの体験に対する私の気持ちは一生薄れないだろう。

3) 1991年、ミシガン大学のアナバーで、みんなが私の60歳の誕生日の出し物として（若いころからの友人であり、量子力学におけるベルの不等式で有名な）ベルのスピーチを計画してくれた。ところが彼は突然逝ってしまった。ほどなくしてセルンを訪ねた折に、彼の机の前に座った私は、偶然、コンピュータのキーボードに触れてしまった。明るくなったスクリーンに現れたのは彼の最後の電子メールだった。「オーケー、歌をうたうよ」。なんともいえない、悲しい瞬間だった。

4) 私自身が、こみ入った数学的な問題に本格的に取り組み始めたのは、1968年にゲージ理論の重要性に確信してからのことである。博士課程の大学院生として入ってきたトホーフトが、すばらしい仕事を成し遂げてくれたので、私はおおいに満足だった。

おかげで1971年のアムステルダム会議において、私は自信をもって彼を物理学界に紹介することができた。会議の世話役だった私は、プログラムを自由に設定することができたのである。

注1…オランダ語で「きれいな船 (clean ship)」の意」という名前のソフトウェア。これは数学における方程式に対して記号的な操作を行うものであり、数式処理ソフトウェアとしては最初期のものである。

注2…「繰り込み」とは日本の朝永振一郎や米国のR・ファインマンらが考案し量子電磁気学で成功をおさめた数学的な処方。量子論がからんだ理論では電子の質量や電荷の値が無限大(∞)になるといふ困難が生じる。だが、「繰り込み」の処方を使うとあちらこちらに現れた無限大が消え去り、理論が計算可能になる。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia: Martinus Veltman
- 2) 三河アララギ、P 40、第59巻、第10号 (2012)
- 3) 三河アララギ、P 40、第59巻、第6号 (2012)
- 4) M・ヴェルトマン（東島清・東島仁共訳）『素粒子世界における事実と謎』（培風館）

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十二 柴生田稔 3

歌よみの附合するなど幾度か戒め給ひしは我のみならし
りしか 昭和三十一年 『麦の庭』

歌人の会合に出るなど言われたのは自分だけだったの
だろうかという内容である。佐太郎などが歌壇の中央で
活動するのを見ての感想だろうか。研究に邁進せよとい
うことでもある。

下りゆく村の小路の昼ひそかにて十右衛門家も伝右
衛門家も障子とざせり 昭和三十四年 『入野』
最上川のゆたけき水に西欧を思ひてわれは君を偲び
つ

茂吉の故郷金瓶を訪ねたときの歌である。一首目は茂
吉の生家を継いだ兄伝右衛門家、茂吉の妹が嫁いだ十右
衛門家も障子を閉ざしてひっそりしていると詠む。二つ
の固有名が師への思いを深くしている。二首目は、茂吉
が愛した最上川の水の豊かさに西欧の（たとえばドナウ

川の）大きな文化の流れを思い、その流れの中に学んだ
茂吉を偲ぶという歌である。

赤き門くぐりて赤き屋おくに向ふ心は足りぬかくのごと
来つ 昭和三十七年 『入野』
船笛の音も聞えぬ長崎の朝さめて高き窓に降る雨

以下、「長崎（茂吉先生の跡を尋ぬ）」と題する一連、
茂吉が医専教授として約三年間過ごした長崎を旅したと
きの歌を読む。以下便宜的に「長崎」を文頭に置く。

一首目は、たとえば茂吉がしばしば通つて「四海楼に
陳玉ちんぎよくといふをとめ居りよくよく今日も見つつかへり来」
（大正八年『つゆじも』）と詠んだところでの作である。
二首目は、茂吉が何度も詠んだ長崎の港の船笛が聞こえ
ないことをいう。

最上高湯君は恋ひつつこのぬるき外湯の風呂に下り
ゆきけむか 昭和三十七年 『入野』
犬一つわれにまつはる君が恐れし蛇の時にはまだ早
くして

「長崎」 茂吉は大正九年六月に流行性感冒から肺炎を
併発、咯血に及んで転地療養を強いられた。右の歌は茂
吉が転地した佐賀県の古湯温泉を尋ねたときのものではあ

る。一首目は、先生がかつて母上を葬ったあとで行った最上高湯（今の蔵王温泉）を恋しく思いながらこの古湯のぬるい温泉に下りて行かれたのだからとうとう意味である。古湯温泉のぬるさを茂吉は、「ほとほとにぬるき温泉を浴むるまも君が情を忘れておもへや」（大正九年）と詠んでいる。下句の「君」は同道してくれた長崎病院の助手の一人への感謝を言っている。

二首目では茂吉が恐れた蛇の季節にはまだ早いと詠むが、茂吉が古湯での蛇を、「此処に来て蛇のあまたを見たりけり常日ごろ蛇をおそれゐしが」（大正九年）と詠んだこの歌を踏まえているのである。

しづかなるあたりに水は響きゐて鳴滝の道われにや
すらに 昭和三十七年 『入野』

鳴滝の瀬に立つ水の音ひそかシーボルトのあと空し
といへど

「長崎」茂吉が「シイボルト鳴滝校舎」と題して詠んだところを尋ねたときの歌である。茂吉は水の音を「鳴滝の激ちの音を聞きつそ西洋の学に日々目ざめけむ」（大正九年）と詠んでいる。

その唐寺のいらかも今は残らねど雨はけぶらふ海と
山とに 昭和三十七年 『入野』

石だたみ古りしをせめてよろこびて夕べふる雨福濟
禅寺

「長崎」一首目の「唐寺のいらか」は茂吉の「こののみ寺より目したに見ゆる唐寺の門の甍も暮れゆかむとす」（大正九年）を踏まえている。二首目は茂吉の「のほり来し福濟禅寺の石だたみそよげる小草とおのれ一人と」（同）を踏まえたものだろう。

森路匆平その犠牲者の一人なるを悲しみて君報じ給
ひき 昭和三十七年 『入野』

昭和二十年のことを回想している。森路匆平（本名高谷寛）は茂吉が長崎医専教授時代に肺を病んで入院した県立長崎病院の助手で、入院中の世話、更に転地療養に同伴するなどをした人である。また、医専の学生らによる文芸誌「紅毛船」の同人であり、その面でも茂吉の指導を受けた。右の一首は、その森路が昭和二十年八月九日のアメリカ軍による長崎への原爆投下で犠牲になったことを茂吉から知らされたことを詠んでいる。これは、「長崎の森路匆平（高谷寛）とその妹さんが原子爆で死去確実となりました」（昭和二十年九月二十六日付）という、山形県金瓶に疎開中の茂吉からの手紙のことを素材にしている。

楽しい時間 13

山本紀久雄

2013年10月31日

10月は、辻先生のご自宅に伺った。

東急田園都市線の青葉台駅、あいにくの台風まじりの強い雨の中、辻先生が駅に車で迎えてくれた。恐縮しつつも助かる。車窓から丘陵地帯を開発した整った住宅街を見ていると、この地区はバブル時代に大ヒットしたテレビドラマの街だと思ひ出す。

それは「金曜日の妻たちへ」で、今から30年前の1983年（昭和58年）に始まり、三年間シリーズ化されたTBS連続テレビである。

多分、記憶に間違いなければ、核家族間の交流とそこに起さる不倫を題材にした「不倫ドラマ」で、別名「金妻（キンツマ）」として知られ、放送日の金曜夜10時には主婦が電話に出ないとまでいわれるほど大ヒットしたはず。

登場人物は年齢が30代から40代前半の既婚男女、生活程度は「中の上」、東急田園都市線沿線の新興住宅街でのおしゃれな暮らしぶりも話題となった。出演は古谷一行、小川知子、いしだあゆみ等。

運転している辻先生は、この当時パリ在住であったなら、このドラマは観ていないと思われるが、年齢的にはドラマ主人公と同世代ではないかと推定する。

当方はドラマと同世代で、このドラマがヒットしているこ

とは知っていたが、残念ながら当時の生活実態からテレビを観る余裕はなかった。

ひどい赤字決算の日仏合併企業の社長に就任し、日夜、経営改善対策と、考え方が基本的に異なるフランス親会社の幹部と喧嘩する毎日だった。

オフィスは赤坂TBSの隣ビルにあり、月曜日に出社し、この日の最終便の新幹線が飛行機で地方に出張、戻ってくるのは木曜日夕方。金曜日は会議と片付けし、夜は地方から上京した得意先を赤坂で接待するという毎日。

売上期待への「おもてなし」であるから、レストランや割烹での食事と二次会を頑張って、自宅に戻るのは深夜。当然ながら「不倫ドラマ」は終わっている。

この二次会で得意先が最も喜んだのはレストランシアター「コルドンブルー」だった。食事を終えてのショー見物であって、結構有名な芸能人のレビューショウとヌードショウは見応えがあった。

海外からも有名スターや政界の著名人が訪れ、フランスのル・モンド紙に「レストランシアターではフランスのクレイジーホースと、ジャポンのコルドンブルーが世界の雄」と書かれたこともあったが、実際のところ、これは誇大報道で、クレイジーホースには到底敵わないというのが、当方の見解。しかし、このように繁盛したが、バブル崩壊の波に押されて、惜しまれながら1994年に幕を閉じた。

ところで、北朝鮮の金正日が「コルドンブルー」に度々来ていて、その時期が当方とタブツていたことを、何かの雑誌で読んだことがあるので、ステージ明かりのみの暗闇の中、

顔を会わしているのかもしれないと思っている。

いずれにしても、このような歓待作戦も含めて、孫子の兵法で展開したマーケティングが時流の波に乗って成功し、三年目に黒字化転換、五年目には累積赤字が消えた。

そのころ、ちょうどデンマーク・コペンハーゲンの人魚像の前でお会いした関東学院大学の中田重光教授(当時)によって、合弁企業状況が1994年にダイヤモンド社から「ブランド成功物語」として出版されたのが楽しい思い出である。

話は年寄りの昔話になってしまったが、フランスではしばしばパーティーやフランス料理レストランに招待された。

東京でも大使主催のフランス大使館パーティー、パリのコンコルド広場に面したホテルドゥクリヨンでのパーティーでは、大女優のカトリーヌ・ドヌーヴと会ったこともよい思い出だが、今考えると赤っ恥である。

何もマナーを知らずして、数多くのパーティーや会食に出た。その当時は「知らぬが仏」、見よう見まねであったが、今、毎月、辻先生のレストランを受けると、非常識マナーであったと気づく。バブル経済の驕りをバツクに、マナー知らないことを武器にし平然としていたことを深く反省している。もっと早



く、辻先生のマナー&パーティーコーディネート講座に参加すればよかったと思っていると。遅すぎるが・・・。さて、大雨の中到着した辻先生の自宅、傾斜地に面している、家は道路に面した車庫の上。石階段を上っていくと芝生の庭。よく刈り込んであって、水滴が輝いている。

玄関に入るとヒノキの香りがする。ヒノキの香り(フィトンチッド)は、アレルギーの原因であるダニの繁殖を防ぎ、人間をリラックスさせる効果があるという。

広いヒノキ床のリビングと、その向こうが畳部屋で少し高くなっているが、その上り口角の太い柱に目が吸い付く。ヒノキの丸太で、よく削ってあり磨かれている。

素晴らしい大黒柱ですねと、その場に来られたご主人にお聞きすると「吉野の百二十年モノです」との答え。この柱が辻家のブランドマークだろうと思う。

ところで、今日は既にテーブルの上に料理が並んでいる。「ホタテのベーコン巻」「ポテトカナッペ」「わかさぎのエスカベッシュ」「ポークピカタハーブ風味」「スティックサラダ」「ローストビーフのオーロラス添え」「若鶏のトマト風味」「チーズフォンデュ」「スイートポテトとアップルの重ね煮」
いとびあでは三品だが、今日は九品。これを辻先生が一人で調理したという説明に唖る。さすがだ。手早いし、おしゃれ感覚で、美味しい。

ヒノキの香りに満ちた空間で、皆さんとブッフエスタイル過ごせた。楽しい時間である。

子規の短歌革新とアララギの歌人 (17)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書―第六回―

今月の要旨

○投書に対する反論

新聞「日本」講読の読者からの手紙に対する反論を中心とした返書である。

『御書面を見るに愚意を誤解被致候、殊に變なるは御書面中四、五行の間に撞著有之候』
と書き出している。

『皇国の歌は感情を本として』云々とは何のことか。詩歌に限らず総ての文学が感情を本とする事は、古今東西の基本理念であり、感情を本とせず理窟を本とするものは文学にあらざるものなり。

『いづれの世にいづれの人が理窟を読みては歌にあらずと定め候哉』とは驚きいったご質問である。理窟が文学に非ずとは古今の人、東西の人ことごとく一致した定義で、もし理窟を文学なりと言う人あれば、それは大方日本の歌よみ位ではなかるうか。

『同じ用語同じ花月にてもそれに対する吾人の觀念と古人のと相違する事珍しからざる事にて』云々。この点に關して子規は

「昔は風帆船が早かつた時代もありしかど、蒸氣船を知りてをる眼より見れば、風帆船は遅しと申すが至当の理に有之、貫之は貫之時代の歌の上手とするも、前後の歌よみに比較して貫之より上手の者外に沢山有之と思はば、貫之を下と評することもまた至当に候」

『日本文学の城壁ともいふべき国歌』云々とは何事か。代々の勅撰集の如きものが日本文学の城壁とすると、実に頼りがいのない城壁でこれでは西洋の文学に対抗できない。かくのごとき薄っぺらな城壁は、大砲一発で破戒されるであらう。従来の和歌を以って日本文学の基礎とし、城壁とするのは弓矢劍槍で戦うのと同じこととてい大砲には勝てない。日本文学の城壁を堅固なものとする為の手段が写生である。西洋の油絵描きも神とか妖怪とか現実には存在しないものを書くが、あくまで写生の基本がベースにあるので立派な絵となっている。日本の和歌も写生を基本にし、例えば和歌に使う用語も雅語のみにこだわらず、俗語、漢語、洋語を必要に応じ用いるべきである。それにより和歌の旧思想を破戒し、城壁を堅固なものとするのできるのである。

富士山の短歌 (3) 夏 目 勝 弘

卷九(や・ゆ・よ・ら・り・ろ・わ・ゐ・ゑ・をの部・拾遺)

吉江喬松(明治十三年生 長野)

○夕づく日空にかぎろひ紫にうち煙りつつ富士暮れ残る

渡邊千代子(二十七歳・静岡)

○岩室に寝ねつつ聞けば戸の前に夜道する人皆休み行く

○火山砂の黒き生ふる虎杖のみどりに透きてお山明けゆく

(富士登山)

尾上紫舟(明治九年生 岡山)

○夕暮の空に富士ありわがこころつくところなく旅の道ゆく

(汽車にて)

補卷(明治初期篇・補遺) 323名

秋山光條(天保十四年生・江戸八丁堀)

○富士の根の雪吹下す夜嵐に月も氷りて散るかと思ふ

(富士川の邊にて)

大國隆正(寛政四年生・石見の人)

○高しとは只見る人の言葉にて富士はさりとも思はざらむ

狩野芳崖(文政十一年生・長州)

○うつくしくあやにたへなりかしこも神のつくれる我おほみ山

黒川真頼(文政十二年生・上野桐生)

○わかれつる天と地との中空にひとりのこれり富士のしば山

山岡鐵舟(天保七年生・飛騨)

○晴れてよしくもりてもよし不二の山天の姿はかはらざりけり

保田光則(寛政九年生・仙台)

○日の本の國の鎮めと神代よりかむさびいます山はふじのね

小谷古蔭(文政四年生・鳥取)

○富士の嶺の雪は積りぬこちこちの國の貢も今はこぶらし

○天雲を吹き漂はず朝北に不二の高嶺の見えかくれつつ

大村八代子(明治二年生 鳥取)

○さらさらと海の風うけ砂糖黍あをきが上に雪の富士見ゆ

○いかめしくたつ黒き富士ぬばたまの岩室の灯は星につづけり

(山中湖畔三首)

○裾野風清したふとし朝日昇るそのたまゆらの真赤なる富士

徳富久子(文政十二年生・熊本)

○打むかふ人もかくこそ久方の雲井のふじは山としもなき

深井春子(明治十七年生・長野)

○正月の晴れたる空に富士をみつつ三島へ下るうす雪の道

蕨 眞(明治九年生・千葉)

○煤色の岩垣ならし降りしきる雨のいきほひひねもすも見る

○ま心ゆこがねの水は天の原山三つこえてのみえつるかも

○天地にいたりわたれる高圓の虹の環内の岩の秀に立つ

○神岩のなりたる嶽のふもとべはうらあたたかくおもひ足るかも

○夜半にして雨戸を押せば白雪のゐをるま近ゆ月おし照れり

「氷魚」のことから (155) 岡本八千代

もう155回の「氷魚」の稿を書こうとする私、ズーと正岡子規のことを書きたかった私、ありがたいことに、「三河アララギ」に載せていたゞき今に続いている。それを毎月、松山の子規記念博物館に心臓強く贈呈している。

宛名ははじめ天野祐吉館長だった。(2002年2007年)そして名誉館長になられた人。この方は、コラムニストとしても有名。——次の館長は、竹田美喜先生で、現役中。この方は、今活躍中の有名な俳人であった。お二人とも、そうとも知らず、お目にかかったこともないままの私である。にもかかわらず、贈呈の都度、ていねいなお礼のお言葉のハガキを下さったのだった。私は、うれしく感謝しながら今も続けている。

最近、私は、「正岡子規の世界」(角川学芸出版)を読んだ。その中に「正岡子規の人と文学」と題して、天野祐吉氏と佐々木幸綱氏と坪内揆典氏の座談会(三人の写真入り)の文学論が載っていた。(76頁)

三人ともども、「子規は苦しんでいても、明るい人だった」とか、「文章の正確さがあった」とか、「子規の写生とは、いわゆる自分の目でものを見ることだ」とか、「子規は周りの空気まで描いている」などなど語っている。

そして、またまた驚いたのは、この本の中(161頁)に、竹田美喜先生、(この頃先生と宛名書きしている)の「須磨

の風」と題した文章が載せられていたことだ。

・「六月を奇麗な風の吹くことよ」の子規の俳句があつて、須磨の題もつけられている。明治二十八年(1895年)七月二十三日に、神戸病院から須磨保養院へ移っている時の句らしい。そこは、須磨の海に沿った、風光明媚な地であつたこと。そして、また、

・「夏瘦の骨にとゞまる命かな」

の句を内藤鳴雪に送つたりした子規。

・「一たびはつなぎとめたる玉の緒のいつかは絶えんあすかあさつてか」

の短歌の一首も。

・「須磨の松林を吹く風や、波の音が生き返らせてくれたのだという喜びが最後まで子規にはあつたようです」

と、俳人、美喜先生の文章があつた。

私は、本のおかげで、一度にお二人に対して、なんとなく、近づきやすいようなあなたかさのような親近感をひとり感じて感激していたのだった。

しかし十月二十一日の中日新聞の夕刊で、天野祐吉氏の計報を知つた。——人間の不定に驚き、その不可思議に悲しみの心に落ちてしまった。……

今、庭にはホトトギスの花が群れて咲いている。子規のペンネームのように静かに寂しそうに……

子規の小説「我が病」、二回は次回へ。

ことのはスケッチ (420) 今泉 由利

『ビックバン』

その時の宇宙全体が、灼熱の「火の玉」となった「ビックバン」がおきた。138億年前には爆発するだけの大きな要素があった訳で、何もないところが爆発するはずがない。いったい何が爆発を誘発したのだろうか。

宇宙に関しては、ここから先は何も無いとか、線を引くとか、境界とか……ふさわしくないと。私の頭で考えることが出来ない。無限大と無限小で、宇宙は出来ていると思っ

ている。一番大きな宇宙から、一番小さい素粒子をみつける。宇宙の「なぜ」は、解き明かす専門の科学者方々の発見のニュースを待つていれば良い。

「どうだったのか」と、受け入れても、受け入れても、どうしては続く。

本を読む、つくばのKEK高エネルギー加速器、測定器を見にゆく。公開講座にゆく。本郷キャンパスでの公開講座にも出席する。

近く近く、加速器に添って歩いたり、むかし、鉄にコイルを巻いて磁石を作ったことが思い出される……その時の磁石とは測り知れないへだたりはあるけれど、なんだか親しみが湧く電磁石が限らないほど並んでいる。これが加速器。陽子を光速近く走らせ、その陽子と陽子を正面衝突させ、飛び出てくる未知の素粒子を調べると。

このような操作により、宇宙の元が作り出せ、より精度、

パワーを増すことで、もつともつと、知りたいことを知ることが出来る。

もう安心して待つていれば、かならず大発見のニュースがやってくる。

加速器とは、テレビのブラウン管、電子レンジ、スキャンしたり、MRIなど医療装置……身近にいつの間にか多く利用されていることを知る。

ビックス粒子が発見され、これが最後の小さい粒子とは決められないことがわかった。

ビックバン直後はとても熱く、素粒子は皆、光と同じ速度で飛び回っていたという。宇宙が冷えると、ビックス粒子が動かなくなり、他の素粒子はビックス粒子の影響で動きづらく、その動きにくさが質量なのだと。

人工ビックバンで宇宙の始まりと同じ状態をつくる加速器で粒子同士を衝突させ、粒子が碎け散るのだと思つていたら、碎けるのではなく、新しい粒子がとびだすのだそう。そうと決まれば、まだまだ新しい粒子が、いくらでも潜んでいるのではないか！

今、私が解らないのは、どうして光子はビックス粒子と作用せず質量ゼロのままにいるのだろうか。

宇宙空間のあらゆる場所、真空中、空气中、物質の内部……ビックス粒子が満ち、他の素粒子を動き難くすることで、原子が生れ、原子から物が出来、宇宙も地球も、人間も……あらゆる物体の構造が、バラバラにとび散つてゆかないで保たれるようになってい

る。この頃、ビックス粒子に守られている自身をみつめ、なんだか孤独ではないような……安心してぐっすり眠る。

編集室だより【二〇一三年 十月】

○マリア・マルタ。セリーナさんの姪。アルゼンチンから逢いにきてくれた。

セリーナさん一族の子供達を育てたベビーシッターのマルガリータは、マリア・マルタの次に、私の子供達を育てて下さったのであり、ベビーシッター姉妹というのかな。だから、とても話が近く、なつかしい時を過ごせた。

○北海道岩見沢、オオウバユリ群生地を訊ねられた富岡さん、大きな箱に入れ、種子があふれだしているオオウバユリの種莢を送って下さった。部屋中を種にうもれて楽しんでる。

○人生はじめての仕事。アルゼンチンでコンデンサの工場をはじめた時のスタッフ技術者山田君とのり子さん夫妻が、二年に一度づつ逢いにきて下さる。なつかしく大切な人達。お世話になりましたね。

○一石氏のエッセイ、物理学者と詩歌の世界(44)は、ピーター・ヒッグス博士でした。今日、ノーベル賞のニュースをよろこびます。

○あまりの暑さ故、休んでいた北区の卓球練習に出掛け、聞くところによると、暑いと休んだのは私だけということだった。

○渋谷、ブancamラ・ザ・ミュージアムに於てレオナルド・フジタ展。濃やかな感性、素晴らしい特性、技術。おもわず微笑み、おもわず泣きそうに浸りきった。

○小橋邸の前の道路の落葉掃き。桜の葉っぱはみな虫喰い、小さな穴があいていた。桜って美味しいんだな。桜チップ

の燻製も花も紅葉もみんな良い。

○本郷キャンパス。ILC国際シンポジウム、宇宙の謎に迫れるか。せっかくのこと、一言も聞きのがすまい。

○品川体育館での卓球のあと、品川プリンスホテルの水族館にゆく。ノコギリザメ、マンタ、ペンギン、タカアシガニ、磯ギンチャク：見たこともなかった魚の数々。魚の頭を上にして、縦縞、横縞を決めるそうだ。

○乃木坂の国立新美術館へゆく。「おくてん」で出逢った方から「二紀展」の案内をいただいた。ものすごく大きな美術館。ものすごく大きな絵。描くにも、運ぶのにも飾るのにも：びっくりする。

○東宝のカメラマンでした鷲尾夫妻と、西荻の「磯はん」へ。店長さんがとても愉快。知らず知らず、こちらもおしゃべりになってしまふ。知らず知らず食べてしまふおいしさに。○青葉台の辻先生のホームパーティーへ。外国に長く生活しておられた先生の家は、共通を思うところが多く、リラックサ出来る。ヒノキで出来ている家のヒノキが香りながら。若い人達に出逢えた。

○向島百花園吟行。百花の木々の今と出会う。花は過ぎ、実が稔りゆくとき、見たものは言葉になってリズムを共有。同行があることは見える範囲が大きく広がって、うれしい。

○百花園からスカイツリーが近く見え、帰りがけは「すみだ水族館」へ。ミスクラゲ、ベニクラゲ、タコクラゲ、オワンクラゲ：いつまでも眺めていたい。

和菓子街道 (86)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(9)

津から江戸に向かう人を見送ったという江戸橋、聖徳太子ゆかりの四天王寺を過ぎると、伊勢街道は津宿にさしかかる。

〈伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ〉と『伊勢音頭』で唄われる津は、古くは安濃津と呼ばれる良港であったと同時に、津藩主藤堂家の城下町としても栄えた。当然ながら、老舗和菓子屋も多い町だ。

津独特の菓子を求めて立ち寄ったのは、津の中心部を通るアーケード街から一筋東の通りにある玉吉餅店。江戸時代後期創業で、八代目と九代目が郷土菓子を中心に店の味を守り続けている。

津の郷土菓子と聞いて求めたのが「やじろ」。もち米にうるち米を混ぜた「たがね」を短冊状に切り、串に刺して焼いた餅菓子だ。つぶつぶとした



米の食感が楽しく、素朴ながら米のうまみが味わい深い。通常の餅より切れがよく食べやすいので、年配の方々にも好まれるそう。餅街道とも称される伊勢街道ならではの、餅菓子のバラエティを楽しんだ。

棹状のみたらし団子にも見える「たがね」

◆玉吉餅店

住所：三重県津市大門17-18

電話：059-228-2594

お知らせ

▽新年号の原稿は、十二月一日(金)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※新年号に、年賀広告を掲載します。

二千元をお送り下さい。

編集後記

△大変な猛暑そして次々と襲ってくる大型台風、十月になつてからの気温の変動、体調を崩す人が多いと思われる日々、會員の皆様には如何お過ごしでしょうか。

秋はもの思うことの多い季節です。外を歩くには良い気候かと思えます。そんな時ポケットにメモとペンをしのばせて、思いつくこと、目に見、耳に聞き、肌を感じたことをそつと書いておられた大須賀寿恵先生が思い出されます。今は亡き先輩たちもそんなふうには作歌にいそしまれていたことも。とはいえ、私も思うばかりでなかなか実行にはいたりません。

この十二月号がお手元に届くのは十一月の末になりますが、日々の移ろいの早いこと、三河アラギ誌に載る皆様のお歌に会えることは何よりの喜びです。

寒さも増してまいります。呉々も健康に気をつけてお過ごし下さい。(小野)

三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」會員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに會員になることができます。

◇會員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読會員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇會員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇會員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇會員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十五年十一月二十五日印刷 第六十巻 第十二号
平成二十五年十二月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

今泉 由利

三河アラギ会

三河アラギ発行所 〒一四一〇〇三二

東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

U R L E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創 美